みなみっ子

84 号

令和８年 11 月 13 日（金）
南城市立大里南小学校
文責　校長　與儀　毅

学校教育目標　　自立　　協働　　創造

「遊びの『夢中』から体育の『学び』へ至る架け橋～大里南小学校の小さな挑戦～」

1 「夢中になる遊び」を学びのスタートに置く

没頭できる環境づくり:単なる準備運動や義務的な運動ではなく、児童が思わず没頭・夢中になるルールやゲーム要素（プレイフルな仕掛け）を授業の冒頭や導入に取り入れます。

運動量の確保と心理的ハードルの低下:運動が得意でない児童も「楽しい」「もっとやりたい」と思える空間を作ることで、自然と活動量を増やし、主体性を引き出します。

2 「遊び」から「ねらいのある学び」へのスムーズな移行（架け橋）

感覚的体験から課題意識への変換:夢中になって遊ぶ中で得た身体感覚や気づき（「こうすれば速く走れた」「もっと遠くへ投げるにはどうすればいいか」など）を、そのまま体育科の目標（技のポイントや戦術）へ結びつけます。

指導者の仕掛けと問いかけ:児童の「できた！」「もっとやりたい」という感情を汲み取り、めあてや学習課題へ誘導する教員のファシリテーション（適切な問いかけ・条件設定）の重要性を示します。

3 「小さな挑戦」を積み重ねる学校ぐるみの工夫

スモールステップの設計:大がかりな改革ではなく、1時間の授業における「手軽なルール変更」や「小さな工夫」の積重ねから子どもたちの意識変容を促します。

日常の休み時間や環境との連携:体育の授業時間にとどまらず、休み時間の遊びや校内の運動環境など、日常生活と体育授業の相互作用を生み出す取り組みを紹介します。

4 児童の変容と成果の可視化

体力向上と意識の変化: 運動＝楽しいもの」と捉え直すことで、運動に対する苦手意識の払拭や、自己効力感（やればできる感）の高まりが見られるようになります。

対話や振り返りの深まり:「ただ遊んで終わり」にせず、振り返りの時間を通してお互いの工夫を認め合い、動きのメカニズムやコツを整理・自覚させるアプローチを行います。

